

思い出つなぐ 抱っこかばん

さいたま市の女性(40)が開発した、抱っこもしてもかばんとしても使える「抱っこかばん」が好評だ。夫の死後、子連れの外出先で途方に暮れた経験を基に奮闘、商品化にこぎ着けた。育乳期が終わっても使い続けることができ、「長く家族の思い出をつないでほしい」との願いが込められている。

大門みづきさんが開発した「gyttone(ぎゅとねー)」は、手摺りかばんの面脇のフラスナーを広げるとおむつ替えシートになり、さらに収納されたヘルムを装着すると抱っこひもにもなる。豊むと20リットル四方で持ち運びも簡単だ。耐荷重は30キログラム、5歳児にも使え、使用者からは「地震時の備えになる」との声も。

大門さんは2014年、夫秀行さんと(1)に交通事故で亡くした。長男奏一朗君は当時生後10カ月

さいたまの女性 外出先でのつらい体験基に開発

一周忌も過ぎたある日、動物園に出掛けると奏一朗君が眠ってしまった。抱っこひもは、かざればため持参していた。周囲には、母親の傍らで父親が子どもを抱っこしている幸せそうな家族。子どもと荷物を一人で抱え、必死で涙をこらえた。「つらい思いをしている人は自分だけじゃない」。夫を失ったショックで仕事を辞めた大門さんだったが、持ち運びに便利な抱っこひもを開発に取り掛かった。美術大で学んだ経験を生かしてデザインを練り、自宅のミニで試作を重ねた。

必要な資金はクラウドファンディングで集め、行政窓口で紹介してもらった福島県本松市に工場を持つ「ヌーカー」に製造を依頼。17年9月から1万9800円(税抜き)で販売を始める。これまでに想定を超過約200個が売れた。

「商品が出来上がるにつれ、精神的にも立ち直れた」と大門さん。何かを突き詰めてやりきった経験、夫の分まで息子に伝えていきたい。問い合わせはkanadel@ncc2015@gmail.com



「抱っこかばん」を開発した
大門みづきさん=さいたま市